

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：64302

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12517

研究課題名（和文）戦後歴史学の史学史的研究 日本中世史研究の政治的性格を中心に

研究課題名（英文）Historical research on postwar history

研究代表者

呉座 勇一（GOZA, Yuichi）

国際日本文化研究センター・大学共同利用機関等の部局等・助教

研究者番号：50642005

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の最大の成果は論文「網野善彦とベラ・ザスーリチへの手紙」の執筆である（今年度発表予定）。

本研究では、網野善彦の研究の展開過程を再検討した。網野本人の証言によれば、網野の代表作『無縁・公界・楽』の核心的テーマである「無縁」＝「原始の自由」は、ベラ・ザスーリチへの手紙（カール・マルクスの書簡）を読み直すことで得た着想が基になっているという。この網野の回顧談の妥当性を、多様な資料に基づいて再検討した。なお、この論文の執筆にあたっては、生前の網野氏と親交があった峰岸純夫氏に対する聞き取り調査から示唆を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

網野善彦は一流の日本中世史研究者であり、その学説の影響力は歴史学界を超えて一般社会に広く浸透した。マルクス主義者でありながら戦後歴史学を批判する立場を採った網野の学説を史学史の中に位置づけることは重要な課題である。しかしながら、圧倒的な知名度を誇った「網野史観」は数々の伝説に彩られており、歴史学者や評論家による従来の網野善彦論は、作られた「神話」に惑わされ、網野の研究の実像に迫れていない。本研究は、同時代資料によって網野の回顧談を相対化し、網野の研究の真の軌跡を明らかにした。この研究手法は他の学者を対象とする評価にも応用可能であり、大きな学術的意義・社会的意義を持つと考える。

研究成果の概要（英文）：As one of Japan's best-known scholars, Aino Yoshihiko (1928-2004) made wide and far-reaching contributions to historiography, but he is most commonly credited with proposing a new vision of history based on a critique of the Marxist methodologies that dominated historical studies in early postwar Japan. His unique perspective on the history of minorities, including itinerant entertainers and outcasts (both of whom formed part of a larger category he called hin hinogyomin, "non-agrarians") and women, has been compared to the social history of the Annales school.

The primitive belief that the world belonged to the divine and could not be possessed by human beings endured, Aino argued, in civilized societies as well. He gave the name muen to the Japanese expression of this original philosophy of non-ownership and non-possession, reinterpreting the history of the archipelago in terms of the conflict between it and the logic of private ownership (uen, "connectedness").

研究分野：日本中世史

キーワード：史学史 中世史 戦後歴史学 オーラルヒストリー

1. 研究開始当初の背景

歴史学においてグランドセオリーの喪失と研究の個別分散化が問題視されて久しい。そのような状況を打開するための手がかりを得ようとしてか、史学史研究が盛んになっている。特に近代歴史学の捉え方に関しては、研究の深化によって従来の理解とは異なる評価が生まれてきている。明治初期の修史事業（修史館における『大日本編年史』編纂）における編纂構想をめぐる論争を丹念に読み解き、専ら歴史学が天皇制国家に屈服した端緒としてのみ語られてきた久米邦武筆禍事件に新たな光を当てた松沢裕作『重野安繹と久米邦武「正史」を夢みた歴史家』（山川出版社、2012年）や同「修史局における正史編纂構想の形成過程（前掲『近代日本のヒストリオグラフィー』）」は、一次史料を用いて正確な歴史を書くことの社会的有用性の問題など、歴史学のあり方そのものを問い直す鋭い論考である。

佐藤雄基「明治期の史料探訪と古文書学の成立」（前掲『近代日本のヒストリオグラフィー』）も、黎明期の近代歴史学と社会との回路を探った好論である。これまでの日本古文書学成立史をめぐる議論では、西欧古文書学の影響を重視するか、日本におけるアカデミズム史学（実証史学）の内在的発展を重視するかという二項対立に陥りがちだった。これに対し佐藤論文は、明治政府の修史事業の一環として行われた史料探訪の手法が日本の古文書学を規定していった（様式論への傾斜、形態論の軽視）ことを明らかにしている。

皇国史観の主導者として戦後の歴史学では黙殺されてきた平泉澄に関しても、今谷明氏が、黒田俊雄の権門体制論は平泉澄の研究の剽窃であるという刺激的な論考「平泉澄と権門体制論」（上横手雅敬編『中世の寺社と信仰』吉川弘文館、2001年）を発表して以来、史学史の対象となった。細川涼一「黒田俊雄『日本中世の国家と宗教』」（『日本史研究』574号、2010年）が今谷説に反論し、若井敏明が『平泉澄 米国のために我つくさなむ』（ミネルヴァ書房、2006年）において、平泉の功罪を冷静に論じた。平泉の師と言える黒板勝美に関しても、従来は古文書学の大成者としての側面と「国策に協力した」側面は個別に分析されてきた。だが近年は、廣木尚「黒板勝美の通史叙述：アカデミズム史学による卓越化の技法と 国民史 」（『日本史研究』624号、2014年）、同「日本近代史学史研究の現状と黒板勝美の位置」（『立教大学日本学研究所年報』14・15号、2016年）のように、南北朝正閏論争への参戦や南朝忠臣の顕彰運動などの社会的活動を含め、黒板の歴史家としての営為を総体的に評価しようという動きが出てきた。

戦前における歴史学と社会との関係についての研究が進む一方で、戦後歴史学を史学史の中で把握しようという動きは緒に就いたばかりである。むしろ、近年、戦後歴史学の成果を再検討する動きは盛んである。永原慶二『20世紀日本の歴史学』（吉川弘文館、2003年）は、戦後歴史学を牽引した中世史研究の大家が近代歴史学から戦後歴史学への展開を見事に整理している。また『歴史評論』729号（2011）の特集「戦後歴史学」と歴史学の現在」や、申請者も参加した『日本史研究』574号、591号、616号の特集「戦後歴史学の著作を読む」なども貴重な成果と言えるだろう。

けれども、近年の戦後歴史学再検証は、戦後歴史学を担った当事者による回顧録、当事者の弟子筋による追悼的評価などに多くを依拠しており、バイアスがかかっていることは否定できない。歴史学を政治的に利用した悪例とされる国民的歴史学運動に関しては、歴史学界外の研究者が国民国家論の観点から批判を加えたものの（小熊英二『民主と愛国』新曜社、2002年、など）、学界内では2000年代以降、むしろ運動が宿していた可能性を積極的に評価する動きが

あるほどである。まして 1960 年代後半から 70 年代前半にかけて隆盛した人民闘争史の政治性は、ほぼ等閑視されているのが現状である。

2. 研究の目的

網野善彦(1928-2004)は、日本で最も著名な歴史家の一人である。網野の学問的業績は多岐にわたるが、戦後日本の歴史学界の主流であったマルクス主義歴史学を批判し、新しい歴史像を提示した歴史学者として一般には知られている。芸能民や被差別民、女性などマイノリティの歴史を独自の観点から考察したその研究スタイルは、アナル学派の「社会史」との類似性を指摘されている。

網野は、この世界の全ては神仏のものであり人間によって所有されるべきではないという原始的な信仰が文明社会においても生き続けたと主張した。そして、この「原始以来の無主・無所有の原思想」の日本的な表現が「無縁」であると説き、私的所有の論理である「有縁」と「無縁」の対立を軸に日本史を捉え直した。この網野の学説は、農業生産力の拡大が経済発展の原動力であるというマルクス主義歴史学の通説と大きく異なるもので、日本の歴史学界から批判が相次いだ。

しかし網野本人にはマルクス主義を捨てたという自覚はなく、後年になっても「老マルキスト」と自称し、「私はマルクス主義から完全に離脱したという意識は全然ありません」と語っている。網野が批判したのは、あくまで日本の歴史学界の教条的・硬直的なマルクス主義であった。網野はマルクス・エンゲルスの古典を旧来の解釈に囚われずに独学で読み直し、学界主流の歴史観よりも自身の歴史観の方がマルクスの真意に沿ったものであると考えた。そのような主張をする時に、網野が好んで引き合いに出したのが、マルクスが 1881 年にベラ・ザスーリチに宛てた書簡である。

網野自身の回顧によれば、網野は代表作『無縁・公界・楽』の核心的テーマである「無縁」＝「原始の自由」は、1950 年代後半に「ベラ・ザスーリチへの手紙」を独学で読み直すことによって得た着想が基になっているという。この時期の網野は、日本共産党が主導した国民的歴史学運動から離脱したことをきっかけに共産党の活動から足を洗い、共産党の影響を強く受けていた歴史学界と距離をとっていた。

以上の網野の発言は、「網野史学」の形成過程を解き明かす鍵として重視されてきた。中世史学者の保立道久は、「無縁」論を構築する上で「網野さんが影響を受けたのが、原始社会論をデッサンしたことで有名なマルクスの「ヴェラ・ザスーリチへの手紙」であった」と強調している。

ところで網野の主張に従えば、網野は 1950 年代後半から、「ザスーリチへの手紙」を通じて、進歩史観への違和感を抱いていたことになる。これが事実であるとしたら、網野の先見性は際立っている。果たして、40 年以上経ってからの回想談をそのまま鵜呑みにして良いのだろうか。本研究では、網野発言の真偽を明らかにしたい。

3. 研究の方法

本研究では、網野の学問的変遷を、彼自身が残していた論稿を中心に、時代ごとに再構成してゆく。特に重視する論稿は、彼の中世荘園に関する諸論文や、『無縁・公界・楽』の前提となった 1970 年代の網野の著作である。

まず網野の1950-60年代の議論を、網野初の単著である『中世荘園の様相』を中心に検討し、この時点では網野の研究に「ザスーリチへの手紙」の影響がほとんど見られず、むしろ進歩史観に立脚していたことを論じる。次に、「ザスーリチへの手紙」が1960年代までに国内外で幅広く注目されるようになった文脈と、その前史を検討する。これらの議論は、学界から異端視された孤高の研究者と評価されがちな網野が、実は学界の動向に敏感であったことを明らかにする。次に1970年代の網野の研究の特色を、『蒙古襲来』と「中世都市論」を主な素材として解明し、「網野史学」の中心的な概念である「無縁」が形成されていく過程を跡づける。最後に、無縁論以後の網野の研究が日本の歴史学界に与えた影響を述べる。

4. 研究成果

本研究では網野の学説の変遷を、「ザスーリチへの手紙」との関係を中心に再検討した。そこから浮かび上がってきたのは、1953年の夏を網野の学問の転換点として強調する言説が一種の「神話」だったという事実である。網野は国民的歴史学運動からの離脱後も、マルクス主義全盛の歴史学界での「雲の上の議論」と無関係に研究を進めていたわけではない。アフリカの各地で独立運動が展開し、東南アジアやラテンアメリカでは共産主義運動するという時代状況を背景として、1960年代後半から70年代にかけて学界で熱心に論じられていたアジア的生産様式論争を通じて、網野は「ザスーリチへの手紙」の重要性を認識したと考えられる。

また、網野の無縁論の独創性、あるいは異端性を強調してきた従来の理解を改める必要がある。網野が無縁論を提唱した背景には、「アジア的停滞」を否定するという問題意識があった。この問題意識は当時の日本の歴史学界でも共有されており、網野は決して孤立した歴史家ではなかった。アジア的停滞を否定するために、学界主流がアジア的生産様式論争に取り組んだのに対し、網野は無縁論を構築した。課題に対する解決策が異なっただけで、課題は同一だったのだ。

網野が晩年に至るまで「誰かの影響で私の歴史に対する見方ができたというわけではありません」と独学を強調し続けたのは、「わけもわかっていない概念を駆使して、適当な理屈を組み立てて人を説得したり、論争したりすることに喜びを見いだしていた時期」、つまり国民的歴史学運動に参加していた時期を反省していたからだろう。網野は「ザスーリチへの手紙」という史料には関心を示したが、アジア的生産様式という抽象的な概念には価値を見出さなかったのである。

「文書の一語一語にこだわって、なぜこの文書が書かれたのかを考えながら、訴訟文書などを読んでいく」実証研究の深化に伴い、抽象的な概念に対する網野の忌避感は年々強くなっていく。それは結果的に、日本史学界に「失語症」をもたらしたのである。網野の意図はどうあれ、「網野史学」は実証主義とマルクス主義の協同を目指した石母田の構想を破壊した。もっとも、石母田はマルクス主義歴史学の末路を目にしないまま亡くなったが。

網野が中世史研究を志したのは、石母田正の『中世的世界の形成』を読んで感動したからである。石母田正に心酔していた若き日の網野は「自宅までたびたび押しかけて行ってお話を伺ったり」したが、国民的歴史学運動から離脱した後は、同運動の主導者であった石母田と長く疎遠だった。石母田の研究に対する評価も、「(筆者註：石母田の『中世的世界の形成』を)書かれていることを史料に即して読んでいくと、非常に抵抗があるんです」「明治時代の学者は、既成の理論でものを考えるのではなくて、自分の目で文書や記録を読んでそれと格闘したうえで味わいのある考えを構築されていた」「もちろん石母田さんも偉い人だと思いますけれど、やはり理論

先行のところがあったと思います」と相対化されていった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 呉座勇一	4. 巻 1
2. 論文標題 在地領主法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 松園潤一朗編『室町・戦国時代の法の世界』吉川弘文館	6. 最初と最後の頁 100-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉座勇一	4. 巻 1
2. 論文標題 幕府と土一揆	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 久水俊和編『「室町殿」の時代』山川出版社	6. 最初と最後の頁 298-318
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉座勇一	4. 巻 なし
2. 論文標題 「自虐史観」批判と対峙する 網野善彦の提言を振り返る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 前川一郎編著『教養としての歴史問題』（東洋経済新報社）	6. 最初と最後の頁 pp148-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉座勇一	4. 巻 なし
2. 論文標題 宣伝される大衆僉議 中世一揆論の再構築	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 荒木浩編『古典の未来学』（文学通信）	6. 最初と最後の頁 pp406-416
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉座勇一 兵藤裕己	4. 巻 8
2. 論文標題 対談「歴史と物語の交点 『太平記』の射程」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アナホリッシュ國文學	6. 最初と最後の頁 10-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 呉座勇一
2. 発表標題 「自虐史観」批判と対峙する 網野善彦の提言を振り返る
3. 学会等名 立命館大学 2019年度研究推進プログラム公開シンポジウム「なぜ『歴史』はねられるのか？ 歴史認識問題に揺れる学知と社会」 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 呉座勇一
2. 発表標題 南北朝時代の戦術と武士
3. 学会等名 2018年度東北アジア文化学会春季国際学術大会 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 呉座勇一
2. 発表標題 南北朝時代の戦術と武士
3. 学会等名 第17回ドイツ語圏日本研究者会議 (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 呉座 勇一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 KADOKAWA	5. 総ページ数 320
3. 書名 戦国武将、虚像と実像	

1. 著者名 呉座 勇一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 新潮社	5. 総ページ数 240
3. 書名 武士とは何か	

1. 著者名 呉座勇一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝日新聞出版	5. 総ページ数 288
3. 書名 日本中世への招待	

1. 著者名 松尾葦江 編、呉座勇一 他著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 花鳥社	5. 総ページ数 292
3. 書名 『南北朝内乱と『太平記』史観 王権論の視点から』、『軍記物語講座 第三巻 平和の世は来るか 太平記』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------